

朝鮮通信使と牛窓

「今年初めて日本に渡り、日本の帝は通りません。ません、こころ、よかん、こころ…」不思議な口上で始まる「唐子踊り」(写真②)は、岡山県瀬戸内市牛窓町の疫神社に伝えられてきた稚児舞である。異国風な衣装、特異な舞、そして謎の口上。それを解く鍵が「唐子踊り」の名だ。唐子は韓子に通じ、朝鮮の子となる。朝鮮と牛窓のつながりとは何か。

岡山県瀬戸内市牛窓町は瀬戸内海に面し、古くから栄えてきた港町である。今でも江戸、明治期以来の町並みが残っている(写真①)。江戸時代、朝鮮通信使(以下、通信使)がこの牛窓の港に立ち寄っている。通信使は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって途絶えた日朝関係を、江戸幕府が回復に努め、将軍の代替わりを祝うために、朝鮮国王が使節を江戸に派遣するようになったものである。江戸時代に12回派遣され、大坂までは瀬戸内海を各地の港に立ち寄りながら海路を行き、大坂から江戸までは陸路をとった。通信使が江戸まで往復した11回(12回目は対馬止まり)すべてが牛窓に寄港している。通信使を迎えることは幕府にとっても、道筋の諸大名にとっても一大行事であった。岡山藩でも多くの人や船を出して接待した。牛窓に近い、瀬戸内市邑久町尻海も江戸時代に諸国との廻船で栄えた港である。この地にある若宮八幡宮に通信使の船を描いた絵馬が奉納されている(写真③)。通信使を迎えるためにこの港からも船を出し、使節団を間近で見たのであろう。当時の高揚感が伝わるようである。

牛窓に宿泊した通信使一行の宿舎はどのようにしたのであろうか。その一つが、今も牛窓に残る本蓮寺である。この寺の書院には、通信使から贈られた青磁の壺や、書などが残されている。高官たちはこの本蓮寺や、岡山藩の建てた御茶屋と称する屋敷に宿泊した。しかし、通信使一行は総勢500名近く。その他大勢の随員たちは町なかの商家などに分宿した。一行の中には長旅をなぐさめるための、音楽や踊りを供する人々がいた。そのような人々が牛窓の人々に踊りを披露したこともあったであろう。それが「唐子踊り」として受け継がれ、今に伝えられているのかもしれない。人々の平和な国際交流によって残されたもの、それが唐子踊りなのである。

広島県福山市にある鞆の浦も、通信使が立ち寄った港町の一つである(写真④)。潮待ちの港として栄えた古いたたずまいをよくとどめ、そこから見える瀬戸内の海と島々は実に美しく、この地に泊した通信使が、「日東第一形勝」の扁額を残している。宮崎駿監督の映画「崖の上のポニョ」も、監督がこの地で構想を練った、まさに鞆の浦が生んだ作品であった。

そのような豊かな自然と歴史的・文化的な景観をもつ港の一部を埋め立て、眼前に自動車道を架橋する計画がもちあがった。反対の訴えに対して広島地裁は計画中止の判決を下した。工事よりも歴史的・文化的景観の価値が勝ると。通信使が称えた「日東第一形勝」が守られることを切に願う。

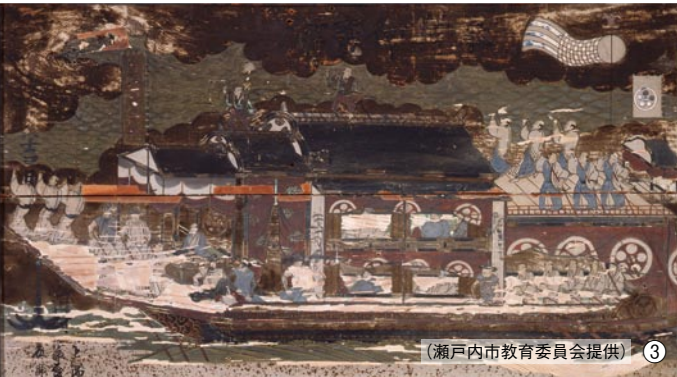
(岡山県瀬戸内市立邑久中学校教諭 阿部泰久)



①



②



(瀬戸内市教育委員会提供) ③

④



写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。